

平成 26 年 6 月 26 日現在

機関番号：24302

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2012～2013

課題番号：24820033

研究課題名(和文) ペルシア帝国期キュプロスの社会と文化

研究課題名(英文) Social and Cultural Contacts in Achaemenid Cyprus

研究代表者

阿部 拓児 (ABE, Takuji)

京都府立大学・文学部・准教授

研究者番号：90631440

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円、(間接経費) 690,000円

研究成果の概要(和文)：東地中海最大の島キュプロスは青銅器時代からギリシア人・フェニキア人の居住地となっていた。また古典期には、アカイメネス朝ペルシア帝国の領土となり、同時にギリシア本土のアテナイ・スパルタも攻略に興味を示した。本研究はこれら多様な外部からの影響にたいし、ペルシア帝国期キュプロス島の社会・文化がどのような反応を見せたのかを考察した。その結果、ペルシア帝国は同島の支配にかなりの譲歩を見せたこと、ペルシア帝国と島内勢力との間の構造的な同盟関係は認められないこと、前4世紀に島内にギリシア文字が導入されたが、このことがとくに島外人からキュプロス島民が「ギリシア人になった」と評価されたことなどを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：My research project starts by discussing one of Isocrates' best known works, Evagoras, which was written to praise the posthumous Cypriot King of Salamis, and examines the social and cultural state of Achaemenid Persian Cyprus during the sixth to fourth centuries BC. After examining several materials, I criticise the view provided by the preceding scholars that there was political and cultural antagonism between Greek colonists and the Phoenicians in classical Cyprus and that this conflict became more intense when the Greeks sought to ally with their fellow-Greeks of the mainland, and on the other hand, the Achaemenid Empire, in a bid to effectively control the island, helped and made use of the Punic islanders; but at the same time, Evagoras was surely eager to pursue a cultural pro-Hellenic policy, for instance the introduction of the Greek alphabet that substituted for the 'anachronistic' Cypriot syllabry.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：西洋史

キーワード：アカイメネス朝ペルシア帝国 キュプロス島 ギリシア人 フェニキア人

1. 研究開始当初の背景

(1) 紀元前 6 世紀なかば、イラン高原に興ったアカイメネス朝ペルシア帝国は、建国後まもなくメソポタミア・小アジアへと領土を大きく拡げた。研究代表者たるわたくしはこれまで、多様な文化的背景を持った集団(「先住アナトリア人」、沿岸部に植民都市を築いたギリシア人、新たな支配者として入植してきたペルシア人)が混住することとなったペルシア帝国期小アジアにおいて、いかなる社会・文化が成立したのかを研究してきた。

(2) 東地中海最大の島キュプロスは、エーゲ海から地中海東部(レヴァント)・南部(エジプト)に抜ける航路上に位置し、古来より海上交通の要衝であったのみならず、銅・木材といった海軍力整備に必要な天然資源に富んでいた。そのため当地には青銅器時代から全島にギリシア人が、南東部にはフェニキア人が入植地を築いてきた。古典期においてもこの島の豊かな自然条件は多くの勢力を惹きつけ、アカイメネス朝帝国第二代大王カンピュセスによるエジプト征服(前 525 年)の段階までにはペルシア領となっていた。また、アテナイ・スパルタなどのギリシア諸都市も、同島攻略に関心を持っていた。

(3) キュプロスは島であって、むろん大陸小アジアではない。しかし、ペルシア帝国とギリシア諸都市間で結ばれた互いの領土を確認する条約(前 449 年の「カリアスの和約」と前 386 年の「大王の和約」)からは、キュプロスは大陸小アジアと同列に帝国領たるべしとするペルシア帝国の公式見解を読み取ることができる。また、ギリシア人入植地域にたいするペルシア帝国の支配という構造は大陸小アジアと類似していた。それゆえ、ペルシア帝国のフロントラインを研究してきたわたくしは、これまでの研究の延長線上に同島をとらえ、多様な外部からの影響にたいしペルシア帝国期キュプロスの社会・文化がどのような反応を見せたのかを考察すべきであると考えに至った。

2. 研究の目的

本研究では、以下の諸点を順次明らかにし、それらから総合的な歴史像を描き出すことを目的とする。

(1) 当該期間(前 6 世紀なかば～前 4 世紀後半)にどのくらいの規模でペルシア人が島内に入植し、彼らがいかなる活動をしていたのか。

ペルシア帝国はその広大な領土を効率的に支配するために、全土を分割し各地域に中心となる都市を定めて、ペルシア中央からそれらの都市に総督を派遣した。小アジア西部では、北部のダスキュレイオン(現在のバンドゥルマ近郊)と中南部のサルデイス(現在

のマニサに比較的近い)が総督都市となった。これらの都市にかんしては文献史料や出土遺物(例えば、印章)などからもペルシア人の大規模入植を確認できる。これにたいして、文献史料から知られる限りはキュプロス島には総督都市が置かれていなかった。とはいえ、ペルシア帝国領である限りは、ペルシア人の入植が皆無だったとも想像されない。そこで、出土遺物、とりわけ碑文に現れる人名分析からペルシア人の入植状況を解明し、それを申請者がすでに分析してきた小アジアの複数の事例と比較することにより、規模の大小を確定する。

(2) フェニキア人入植者が、島住民の最大多数を占めていたギリシア系住民にどのような社会的・文化的影響を与えたのか。

フェニキア人は、島南東部に植民都市キティオン(現在のラルナカ)を建設し、主にフェニキア人の海上交易と銅輸出の拠点としていた。しかし、彼らの動きは前 4 世紀頃から活発になり、銅鉱脈に近いギリシア系都市イダリオンやタマツソスを征服・買収することによって勢力下に収めていった。そこでわたくしは、彼らの活動がギリシア人たちに与えた影響について、ギリシア語・フェニキア語の碑文史料と出土貨幣(とくにその銭銘)の分析から明らかにする。先行研究は、フェニキア人がキュプロス総督を置かなかったペルシア帝国にとっての、島内における利害を代弁していたと推測している。とくに 1970 年から 80 年代にかけての先行研究にはこのような傾向が強く見られ、それは島内のギリシア系住民とトルコ系住民の対立と、彼らをバックアップするギリシアとトルコが衝突したキュプロス紛争という同時代の生々しい国際情勢の記憶が重ね合わされたものと推察される。したがって、フェニキア人の活動にかんしては、このような先行研究の見方が真に妥当であるのか否かにとくに注意する。

(3) ギリシア人たちの文化的な影響力の拡大について。

前 4 世紀アテナイの弁論家イソクラテスは、キュプロス島サラミスの王エウアゴラスを追悼するために執筆した頌詞の中で、ギリシア(とくにアテナイ)の風習を愛好したエウアゴラスを称え、当時フェニキア人支配下に東方風の生活を送っていた人々を、彼が再びギリシアの生活様式に戻したとも読める記述を残す。実は、キュプロスのギリシア人たちはギリシア文字ではなく、キュプロス音節文字という特殊な記号でギリシア語を表していた。また、文法的にもアルカド=キュプロス方言と呼ばれるアルカイック期の、すなわちホメロスの時代に話されていたであろう古い形態のギリシア語を保持していた。このような状況は、本土のギリシア人、とくにアテナイ人からは、ギリシア系キュプロス人

が異文化に属する人々であったとの印象を与えたであろう。しかし、エウアゴラスは音節文字に代わって一般的なギリシア文字を採用し、息子のニコクレスをアテナイに留学させたことが示唆される。したがって、ここではエウアゴラスの文化政策が焦点となる。

以上の諸考察を経たのち、ペルシア人の入植者数が少ないキュプロス島において、どのような社会・文化的な変化が見られ、またそれがペルシア帝国支配とどのように関わっていたかを明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 文献史料

本研究にかんする古典文献史料は、ヘロドトス『歴史』やトゥキュディデス『戦史』などの同時代の歴史書とともに、前4世紀アテナイ人のイソクラテスによる頌詞『エウアゴラス』と、前1世紀シチリアの歴史家ディオドロスの『世界史(歴史叢書)』などになるが、これらは参照も容易であり、読解も難しくはない。しかし、これらの文献史料中にキュプロスにかんする情報が登場する機会は、イソクラテスの『エウアゴラス』を除くと、わずかしかない。『エウアゴラス』にしても、頌詞であるため、歴史的事実を忠実に反映しているとは考えられない。むしろ歴史的事実を上手に誇張するのが、頌詞本来の目的とも言える。したがって本研究においては、文献史料を出発点に据えつつも、同時にキュプロスから出土した碑文を丹念に読み込んでいくことが肝要となる。

(2) 碑文史料

ペルシア時代のキュプロス島では、ギリシア語はギリシア文字(いわゆる、アルファ・ベータ)によってではなく、キュプロス音節文字と呼ばれる特殊な記号で書き表されていた。このキュプロス音節文字が世に知られるようになったのは、1850年のことであるが、解読にはさほど時間はかからず、1869年には音価が確定した。これらの碑文は1961年、O. Massonによって*Les inscriptions chypriotes syllabiques (ICS)*としてまとめられ、公刊された。その後も継続して新しい碑文が出土しており、1983年にはICSの補遺集がオフ・プリントとして印刷されている。フェニキア語碑文にかんしては、かなり古いものになってしまうが、G. A. Cooke, *A Text-Book of North-Semitic Inscriptions: Moabite, Hebrew, Phoenician, Aramaic, Nabataean, Palmyrene, Jewish*, Oxford, 1903が比較的入手しやすい。考察過程では、これら碑文の解釈と、先の文献史料から得られた情報を擦り合わせていった。

(3) 発掘報告等

キュプロスの最新の調査状況・出土史料に

ついて知るためには、キュプロス共和国考古庁が公刊している報告集(*Report of Department of Antiquity, Cyprus*)あるいは考古庁のウェブサイトで情報を追いかけるなければならない。しかし、このような文字情報からだけでは、個々の遺跡の実情はなかなか理解しがたい。そこで、わたくしはキュプロス島に一週間滞在し、レンタカーを借り(キュプロス島内では公共交通がほとんど発達していない)、島内各所に残る遺跡を訪ね廻ることにより、文献のみからではイメージしにくい地形や距離感などを確認した。また、キュプロス島の北の対岸に位置する小アジア沿岸地方にも足を伸ばし(この地域は、キュプロスのギリシア系都市サラミスと交渉があったと推定される)遺跡の一般踏査をおこなった。

4. 研究成果

前6世紀にキュプロス島はペルシア帝国の版図に入った。この時期の島内の社会・文化のあり様について、先行研究者の一部はイソクラテス作の頌詞『エウアゴラス』の「深読み」から、ペルシア帝国の統治政策による島内ギリシア人とフェニキア人の「民族対立」の先鋭化という構図を提示してきた。本研究はこの図式を批判的に検討しながら、関連史料を分析してきた。以下に、その結果明らかとなった歴史像を示す。

(1) 陸軍国家であったペルシア帝国にとって、海洋国家の集団であるキュプロス島の支配は容易ではなく、また海軍力の供給地という観点から見れば蔑ろにはできなかった。そのため、ある程度の自治を認め、大量のペルシア人入植を控えるなど、譲歩の姿勢を示さざるをえなかった。一方、島内では都市王朝がおのおのの損得勘定のもと離合集散を繰り返しており、ペルシア帝国もキュプロス島統治に際し、自らと利害を一にする都市を探し出しその都度手を組んでおり、そこにペルシア帝国=フェニキア系都市キティオンという構造的な同盟関係を見出すことは不可能であった。

(2) キュプロス出土の碑文を読解するかぎりは、フェニキア系都市キティオンでのギリシア系住民の生活を推察できた(文献史料からは、その逆もまた然りであった)。また、フェニキア人がフェニキア由来の神レシェフとアポロンを同一視し、それをフェニキア文字とキュプロス音節文字のギリシア語で表したりするなど、ギリシア人とフェニキア人(と彼らを支持、利用していたとされるペルシア人)との文化的な対立が存在していた、あるいは少なくとも鮮明であったとは想定し難いとし、上述の図式を否定するに至った。

(3) それでは、なぜ頌詞『エウアゴラス』

の作者であるイソクラテスは島内「民族対立」とも読めるような言説を残したのかという新たな疑問が生じた。これにたいし、キュプロス島内のギリシア系住民はギリシア語を話しながらも、その強いアクセント（アルカド＝キュプロス方言）およびそれを表記する特殊な文字（キュプロス音節文字）ゆえに、島外ギリシア人からは「非ギリシア人（バルバロイ）」と見做されていた。このような状況にあって、少年期に亡命生活を経験し、その後アテナイと交流を保ちながら、東地中海の国際舞台で活躍したエウアゴラスがギリシア文字を用いたことは、それまで島内にはほとんど浸透していなかった文化形態を、はじめて公的に導入し、推進したことを意味した。これにたいしイソクラテスはキュプロス島民が（ようやく）「ギリシア人になった」と評価したのであって、これを先行研究者たちがフェニキア系住民の影響から脱し「ギリシア人に戻った」と理解したことに誤りがあったと、本研究は結論した。

（４）ただし、エウアゴラスの方針がその後も継続されたのかと言うと、ギリシア文字の採用についてはわずかに後追いするような現象を確認できるものの、深く根付いたというには程遠かった。

5．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 0 件）

〔学会発表〕（計 2 件）

阿部 拓児、「Evagoras I the Cypriot King of Salamis and His Pro-Hellenic Policy」、10th International Conference on Greek Research、2013年6月28日、Flinders University, Australia。

阿部 拓児、「サラミス王エウアゴラスのいわゆる「ギリシア化」政策」、第 110 回史学会大会、2012年11月11日、東京大学。

〔図書〕（計 1 件）

阿部 拓児、『ペルシア帝国と小アジア——ヘレニズム以前の社会と文化——』、京都大学学術出版会、2015年、320頁。（うち、特に第6章「キュプロス島とサラミス王エウアゴラス」）

6．研究組織

(1)研究代表者

阿部 拓児 (ABE, Takuji)

京都府立大学・文学部・准教授

研究者番号：90631440